

保育者養成における個性を重視した表現表出の試み

杉山 祐子¹⁾・土屋 明之¹⁾

Report on Expression Emphasizing Personality by Art at the Nursery School and Kindergarten Teacher's Training Course

Yuko SUGIYAMA and Akiyuki TUCHIYA

2018年改訂の幼稚園教育要領・保育所保育指針における幼児の育ちの評価は、一人一人の良さや可能性に観点を置くことが明記された。領域の表現においても、幼児の個性を重視した評価が求められる。本研究は、保育者養成校の『造形表現活動』と『音楽表現活動』の授業が関連を持ちながら、学生自身の個性を重視した表現の表出を目的とした。『造形表現活動』では、色彩を切り口にした自分の内面の表現法を習得することで、素直な感情の表出が可能になり、表現を楽しむ姿勢が構築できた。この手法を活用して、『音楽表現活動』では、歌の持つ“ことば”や“メロディ”から受けるイメージを『うたのえほん』として表現した。学生は、造形とことば、音楽のコラボレーションにより、表現表出の緊張感は強くなったが、達成感を持つことができた。さらに、制作中の他者の様子や発表の鑑賞により、表現の多様性に気づき、個性を尊重する姿勢がみられた。今後は、他の領域との関連性の可能性を精査し、個性を重要視した表現表出の理解を進めていきたい。

キーワード：表現、個性、新幼稚園教育要領、保育者養成、色彩、ことば

I. 問題と目的

現在の保育者養成課程の学生は、2018年改訂の幼稚園教育要領・保育所保育指針に基づいた保育・教育を現場で実施することになる。「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の(10)にある「豊かな感性と表現」では、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方に気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる。」と記述されている。この姿は、5歳児に至るまでの各年齢での指導の積み重ねにより築かれていくことに留意しなければならない。注目する点としては、「感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだり」というところである。これは、指導者として、子どもの表現の個性や多様性を認めることと、他者とのかかわりの中

で喜びや発見ができる環境づくりの必要性が読み取れる。

文部科学省(2017)の提唱する幼児に育みたい資質・能力は、5領域に整理されている。これらの領域は、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連を持ちながら次第に達成に向かうものであることとされている。改訂された幼稚園教育要領の5領域「表現」のねらいは以下の3項目となっている。

(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。

(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。

(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

これらのねらいに対する評価は、新設された。それは、「幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。その際、他の幼児との比較や一定の基準に

1) 短期大学部幼児教育学科

対する達成度についての評定によってとらえるものではないことに留意すること」である。技術基準への達成度の評価から、幼児一人一人の個性を重視した評価への変革が行われた点は注視すべきである。

今の養成校の学生の幼児期は、平成10年公示の幼稚園教育要領・前保育所保育指針にある知識技能の達成度の評価を幼児期に受け、その後も他者との比較により評価がなされてきた教育環境に身を置いてきたであろう。保育者となった時、自分自身の経験の乏しい、新しい感性で子どもへの指導や評価が適正にできるかは懸念されるところである。さらに、子どもの個性や多様性を認め伸ばす言葉がけや環境設営などの教育力は、評価の観点に自ら気づき、実践してみることで振り返るという体験を重ねることで身につくと考える。保育者養成校での「表現」では、個性を重視した表現の表出を、言葉や音楽、造形、身体などが相互に関連を持ちながら次第に達成に向かう過程を意識することを目指している。その先に、子どもの個性や多様性を認め伸ばす指導力と評価が構築できると考える。特に、本学では1年次に各分野の『表現活動』を受講し、自己表現の手法をそこで多面的に習得する。その表現力を2年次の『総合表現活動』において、子どものための舞台発表をプロデュースするところまで高める。その総合表現のための足固めも担うことになっている。そこで、本研究は、表現活動の授業における学生自身の個性を重視した表現の表出を目的とする。そのために、イメージの構築から表現表出までの学習過程において、学生の表現への技能と姿勢の変化を報告する。

II. 方法

『造形表現活動』と『音楽表現活動』において、ことばと音楽、造形が相互に関連を持ちながら次第に個性を重視した表現表出の指導法を検討し実践した。対象者は保育者養成課程の1年生100名である。『造形表現活動』は、名簿順に50名ずつに分け、授業を実施している。『音楽表現活動』の授業では、100名を33名の3クラスに分け、3クラスとも同じ取り組みを並行して行っている。今回の研究の対象者は、その中の1クラス33名をサンプルとした。期間は、1年次前期の『造形表現活動』(15回)の4回と、後期の『音楽表現活動』(15回)の3回である。

結果と考察は、『造形表現活動』と、『音楽表現活動』に分けて取り組みと成果を報告する。ここでは、学生の作品の評価と課題達成の自己評価を基に述べる。さらに総合的考察で、双方の関連性を考察する。
(杉山祐子)

II.-1. 『造形表現活動(図画工作)』の色による豊かな感情表現の育成

II.-1.-1. ねらい

学習指導要領の表現の領域に、「(1)生活の中で様々な音、かたち、色、手触り、動きなどに気を付けたり、感じたりするなどして楽しむ。」とある。その中の、色に着目し、色彩による自己表現力の養成を行った。造形による自己表現の目的は、“自分らしい表現の楽しさ”に気づくことである。それが、保育者となった時の幼児の表現を豊かにする指導力の基礎となることと、造形を介した子どもの理解につながるからである。以下に、授業運営を報告する。この取り組みの評価は、学生の作品や学ぶ姿勢を、造形の専門性を持つ教員の観点から述べる。

II.-1.-2. 取り組み

我々は身の回りに存在する色彩から、何らかの影響を受けながら生活をしている。そこで、色彩に関する一般論を教授したのちに、学生のイメージ構築を進めた。

II.-1.-2.-1. 「色からのイメージ喚起」

第1回目は、手元にある12色のクレヨンの色からイメージを各自思いつくまま言葉にし、皆で共有した(表1)。発表しあうことはイメージの表現表出と共有である。それぞれの経験によって感じ方に個人

表1 学生による“12色に対するイメージ”(自由記述)

赤	バラ、リンゴ、イチゴ、熱い、太陽、夏、火、興奮、緊張、怒り、情熱、血、活動的、リーダー、愛
黄	ヒマワリ、ヒヨコ、レモン、バナナ、イチョウ、月、星、光、明るい、警戒、希望、喜び、春、元気、心の病気
橙	オレンジ、太陽、夕焼け、暖かい、穏やか
青	海、水、空、晴天、雨、雲、川、夏、涼しい、清々しい、冷たい、悲しい
緑	草、葉っぱ、森、野原、野菜、柔らかい、春、若い、癒し、自然、生命、安全
紫	芋、ナス、ブドウ、毒、不思議、豪華、エロチック、病気
黄土	ラクダ、土、砂場、砂漠、汚い
桃	桜、春、可愛い、子供らしい、乙女、愛、恋愛、セクシー
茶	チョコレート、土、自然、木、クマ、冬、マイルド、枯野、秋、うんち、運動場、古い
灰	ネズミ、コンクリート、ネズミ、埃、曇り、煙、影
黒	暗い、夜、悪、闇、重い、葬式、不安、怖い、冷静、オシャレ
白	雪、冬、きれい、爽やか、純粋、結婚

差があり、多様であることが共有された。

その後、山脇(2010)によるテキストを用い、一般的な色の持つイメージを学習した。一般論では、寒暖・重さ・物質といった外界の要因との関係や、喜怒哀楽などの内面的な要因との関係を学んだ。このように、独自のイメージと一般論でのイメージの双方を意識することで表現の広がりが発生し、より効果的な表現活動ができることを認識した。

Ⅱ.-1.-2.-2. 「色を楽しむ」

第2回目は、色を塗る行為で“色を感じる”ことを体験した。具体的に何か形を描くのではなく、自分の今の気持ちに向き合いながら行うよう、指導した。作業の強制はしなかったが、全員が取り組めた。

1枚目は、手が動くままに好きなクレヨン

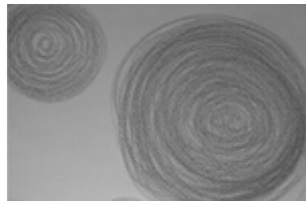


図1 1色によるなぐり描き(例)

1色選んで自由に塗った(図1)。2枚目は、クレヨン2色で、円を書くように自由に塗った(図2)。

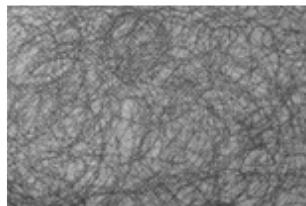


図2 2色によるなぐり描き(例)

3枚目は、水彩絵の具を5色好きな色を選び指や手で自由に塗った(図3・4)。観点は、何かを描こうと思わないことと、絵具と湿った紙の感触を味わうこと、終止は自分で判断をする、とした。

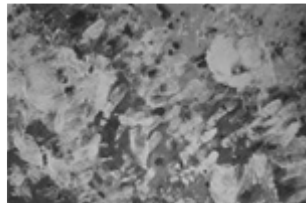


図3 5色によるフィンガーペインティング(例)

4枚目と5枚目は、『温かい』と『寒い』を、指を使って水彩絵の具3色で表現した(図5)。

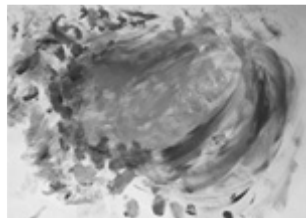


図4 5色によるフィンガーペインティング(例)

自由に色を塗るようと言われても、すぐに取り組める学生は少なかった。そこで、幼児のなぐり描きをイメージするよう指示した。その結果、渦巻きのように曲線をどんどん描いていく面白さを体験できた。手や指の感触で色を味わうと

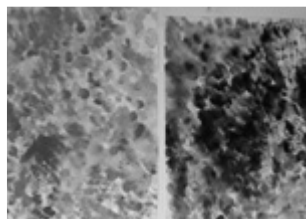
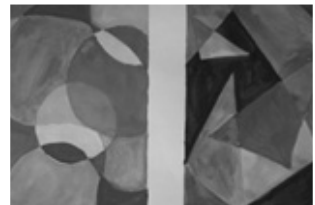


図5 指で描いた寒暖のイメージ(例)

いう体験は、子どもの頃にした泥遊びのような感触を喚起し、自由なイメージづくりに寄与した。寒暖を色と指で表現することは、絵を描く普通感覚と異なる新しい体験ができ、子ども気持ちに戻って色や手触りを感じるという感覚を思い起こすことができた。

Ⅱ.-1.-2.-3. 「色と形で感情を表現する」

第3回目は、これまで習得した色彩の知識を生かし、喜怒哀楽を色彩構成により表現した。A「喜び、驚き、安心、楽」



の感情は曲線、B「悲しみ、怒り、恨み、不安、嫌悪」の感情は直線を用い、画面を10本の線で構成した(図6)。色彩に線と形の要素を加える技法を習得することで、イメージ表出がより具体化された。これは、幼児が描く表現を理論的に読み取る力が養成につながると考える。

図6 感情表現の色彩構成(例)

Ⅱ.-1.-2.-4. 「モダンテクニックを知る」

第4回目は、絵画における以下の5つの技法(モダンテクニック)を学んだ。『吹き流し：ドリッピング』(図7)、『墨流し：マーブリング』(図8)、『合わせ絵：デカルコマニー』(図9)、『ろう染め：バチック』(図10)、『貼り絵：コラージュ』である。これらの技法は、高度なテクニックを必要とせず、行為から生まれた偶然性を利用したもので、幼児期の泥遊びや色遊びの延長である。5つの技法中、多くの学生が興味を強く持って取り組んだのが、マーブリングとデカルコマニーであった。イメージの正確な表出ではなく、行為による偶然性を、自分の表現として楽しんで



図7 ドリッピング

8)、『合わせ絵：デカルコマニー』(図9)、『ろう染め：バチック』(図10)、『貼り絵：コラージュ』である。これらの技法は、高度なテクニックを必要とせず、行為から生まれた偶然性を利用したもので、幼児期の泥遊びや色遊びの延長である。5つの技法中、多くの学生が興味を強く持って取り組んだのが、マーブリングとデカルコマニーであった。イメージの正確な表出ではなく、行為による偶然性を、自分の表現として楽しんで

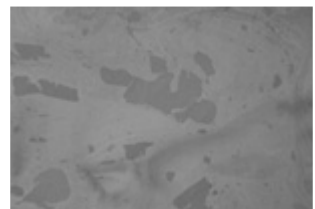


図8 マーブリング

9)、『合わせ絵：デカルコマニー』(図9)、『ろう染め：バチック』(図10)、『貼り絵：コラージュ』である。これらの技法は、高度なテクニックを必要とせず、行為から生まれた偶然性を利用したもので、幼児期の泥遊びや色遊びの延長である。5つの技法中、多くの学生が興味を強く持って取り組んだのが、マーブリングとデカルコマニーであった。イメージの正確な表出ではなく、行為による偶然性を、自分の表現として楽しんで

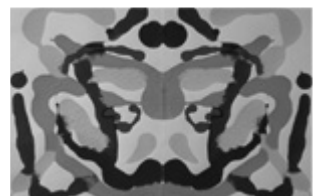


図9 デカルコマニー

10)、『ろう染め：バチック』(図10)、『貼り絵：コラージュ』である。これらの技法は、高度なテクニックを必要とせず、行為から生まれた偶然性を利用したもので、幼児期の泥遊びや色遊びの延長である。5つの技法中、多くの学生が興味を強く持って取り組んだのが、マーブリングとデカルコマニーであった。イメージの正確な表出ではなく、行為による偶然性を、自分の表現として楽しんで

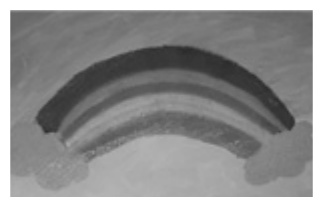


図10 バチック『雲と虹』

受け止める姿が見られた。これは表現の多様性を理解する機会となったと考える。

II.-1.-2.-5. 「心象表現」

第5回目は、「心象表現」に取り組んだ。これまで習得した技法と自己表現力を総合して、色と形によるコラージュ制作を行った。ある作品では(図11)、「青の四角は広く続く平面的な海を表現し、オレンジの丸は浮かぶ太陽。他の丸は太陽からの光を表現した。」とコメントされていた。基礎的な技法がベースになった上で、自分らしい宇宙のイメージが表現されており、造形の専門性の観点から表現力の高さが評価できる。また、図12の作品に対する学生のコメントでは、「一枚の画面に晴れ、曇り、雷、雨、雪を表現した。太陽は普通の丸ではなく変形やドリッピングで形を工夫した。雨や雷、雲は、自分のイメージではカラフルな色で表現したいと思って制作した。」とあり、自分らしいイメージが色や形で自由に表出されていた。また、これらの作品をお互いに鑑賞し合う機会が設けられ、共通の技法でありながら表現の多様性を体感した。色彩の選択、技法の選択、イメージの構築の違いに驚き、感動する姿が散見された。このことは、単なる勝手さではなく、正しい技法の積み重ねにより、自己表現の解放の表れと考える。この過程が“イメージ構築と気づき”の醸成期間と位置付けられる。



図11 学生作品1



図12 学生作品2

II.-2. 『音楽表現活動』における表現表出

II.-2.-1. ねらい

保育現場で歌やパフォーマンスを披露する機会は多い。歌うことは、メロディーやことばから感じるイメージを豊かにし、そのイメージを表現する喜びを感じながら歌える指導が大切である。そこで、『造形表現活動』の学びを引き継ぎ、『音楽表現活動』の授業で、色彩の感性を音楽に活用した自己表現と

他者理解を重視した学習を組み立てた。その成果の観点は、学習の様子と質問紙調査による学生の評価とする。

II.-2.-2. 取り組み

授業は、『うたのえほん』の制作と発表である。表現する素材は“子どもの歌”とした。小林(1998)編集の歌集からも、季節の歌、生活の歌、行事の歌、環境の歌など、保育現場で“子どもの歌”は多用されている。その歌を用いて、歌から得る自分のイメージを、絵本で表現し、歌いながら発表をすることとした。

学習の流れを図13で示す。授業の環境は、33名を6名1グループとし、テーブルを囲むように配席した。学習の過程は各自がワークシート(図14)に記録することとした。以下に、取り組みを述べる。

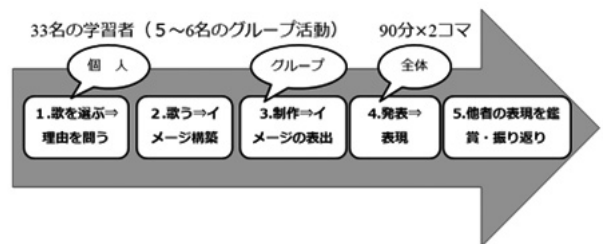


図13 授業の流れ

音楽表現活動Ⅱ:『うたのえほん』

—月—日	
1. 選んだうた	理由
2. 歌詞を書こう	5. 浮かんだイメージ
3. 歌ってみた感想 (*自分自身)	4. 背景の色を選ぶ
3. 歌ってみた感想 (*自分自身) (*聴いてもらって)	
6. 絵本のテーマを決めよう	
7. 作った感想 (*自分自身) (*聴いてもらって)	
8. 発表した感想 (*自分自身)	
9. コメント	

図14 うたのえほんワークシート

Ⅱ.-2.-2.-1. 「歌を選ぶ」

「1. 歌を選ぶ」では、自分が表現したい“子どもの歌”を選択する理由を明確にした。すぐに決定した学生と、迷ってなかなか決まらない学生と、選択の様子さまざまではあったが、自分の観点をもって歌を探すことができた。グループ内で助言し合ってもよいとしたため、選曲の意見交換をする様子が多く見られた。最終的には、自分が理由を明確に持って歌を選んだことで、次の学習姿勢が整ったと考えられる。「2. 歌う」の取り組みは、選んだ歌をグループ内で各自が実際に歌った。これは、声に出し響きを聴くことで、自分の持つイメージを徐々に色彩や形に結び付けていく過程とした。さらに、人前で歌うことにより、表現表出への意識を高めることを目的とした。

次に、歌の歌詞に沿って、1画面に描く言葉や文を決めた。学生によって言葉一つの単位や、ストーリーを重視した1文の単位など1画面に描きたい内容はさまざまであった。ここでは音楽的規則を優先するのではなく、思い描くイメージを優先するよう指示した。これは、表現のねらいの「(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」に当たり、まずは自分なりの表現を優先させた。その結果、絵本の画面は、4ページから8ページとさまざまであった。

Ⅱ.-2.-2.-2. 「制作」

第2回目の授業は「3. 制作」であった。第1段階は、各ページの色構成である(図15)。これは、『造形表現』で培った色彩の技法を生かし表現するよう



図15 背景の色選び



図16 作業の様子

にした。使う材料は、折り紙と色画用紙が主で、その他ヒモやボタンなど身近な素材を各自で考え使った。これは、表現の領域の2内容の(1)生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたり、するなどして楽しむ。」の観点

を体験する機会とした。ここまで、学生の中に歌のこぼれと色彩のイメージが結びつつある状態となってきた。制作はグループごとのテーブルで進めた(図16)。これは岡田ら(2018)の研究により、音楽表現活動においてグループ活動が意見を出し合える場として機能しているという報告がなされていることから、制作においても学生は他者の作業や会話を観察できる環境を設営するためである。

Ⅱ.-2.-2.-3. 「作品発表」

第3回目は、作品発表とした。各々が制作した作品を一人ずつクラスの前で表現した。発表者は、30名ほどの幼児クラスの場面を想定して、ステージの中央に腰かけて、『うたのえほん』が全員に見えるような位置を取った(図17)。歌に合わせてページをめくりながら、自分が描いたイメージを伝えるよう表現した。発表終了後は、全員の『うたのえほん』を展示し、実際に手に取って鑑賞した(図18)。最後に、発表した感想と、他者の作品を鑑賞した気づきをワークシートに記入した。



図17 作品発表



図18 作品の展示

Ⅲ. 結果と考察

Ⅲ.-1. 『造形表現活動』

幼児と色について磯部(2014)は、「年齢を問わず好きな色は青、男児は寒色系と赤や黒が、女児はピンク(もも)や水色を好む傾向がある。幼児の女児のピンク(もも)が好きな傾向は特に強く、逆に男児には人気のない色である。」と述べている。実際、T保育園での絵画教室でも同様な傾向が見られた。このように、これまでの慣習の中で、色のイメージの固定化がみられる。今回の色彩を中心とした実践は、この固定化したイメージを、自分らしい色彩のイメージで良いことを認知する機会になったと考える。

表2 学生の授業に対する評価 (%) n=74

質問	5	4	3	2	1
この授業では学生が授業で自ら考え学習を深める工夫や配慮がありましたか	47.8	33.4	18.8	0.0	0.0
総合的に判断して、この授業に満足できましたか	61.9	19.2	19.0	0.0	0.0

“自分らしい表現の楽しさ”に気づくという目的に対し、学生の評価として、全授業共通の授業評価(5段階評価)より、本研究に関連すると思われる質問2題から見てみる(表2)。80%以上が「自ら考える機会となった」と答えたことから、表現に対して個性を重視していたことがうかがわれる。また、この授業における満足度も80%を超えていることから、楽しさに気づいたと捉えることが可能であろう。

以上の『造形表現』において、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方に気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる。」過程を学生自身がまず体験することで、気づきや感動、他者の作品から刺激を多く受けそれを受容した取り組みとなった。また、保育現場における教室等を、楽しく自由なイメージを育める環境とする壁面構成を考える要素を持つ学習となったと期待する。学生自身が生活の中での面白いと感じる色や形に気づくことが、保育者になった時に、幼児の多様な感性を認め、表現を楽しむ姿を評価できることにつながると考える。(土屋明之)

Ⅲ.-2. 『音楽表現活動』

造形表現活動で培った“自分らしい表現の楽しさ”、歌う表現が加わることによる成果を以下のように位置付ける。

Ⅲ.-2.-1 「うたのえほん」の選曲

学生33名が選曲した曲目数は、全部で28曲であった。重複した曲は、「チューリップ」が4曲と最も多かった。理由は3名が、「好きだから」と回答していた。選曲の理由を表3に示した。「季節感がいい」、「イメージがわいた」が、それぞれ21.2%あった。「季節感」、「イメージがわいた」、「ストーリーが面白い」という理由は、学習の目的である表

現表出の基になるイメージが、すでに描き始められている様子うかがわれた。「好き」、「楽しい」という感情からは、この学習を楽しもうという姿勢がうかがわれた。このように、自分で選ぶ行為により学習を楽しみながら取り組むといったモチベーションの維持につながったと捉えられる。また、ピアノ実技など、他の授業での取り組みと重ねて選ぶ場合も多く、学習を多面的に活用する姿が見られた。

選んだうたを歌うことは、これは『造形表現』で一般的な技法を習得する段階と同様、歌の要素を正確に理解することとした。その上で歌うことで、ことばから得られるイメージのキーワードを表4に示した。ここでは、歌った時の素直な感想を記述するよう指導している。キーワードは多岐にわたっていた。それらは、歌ったことそのものの感想と、制作に向けた心構えが表出していた。これは表現のねらいである「(2)感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。」が機能しているとみられた。この気づきを制作へ反映することが期待できる。子どもが音楽を表現する過程について山崎(2014)は、「感じ取っている雰囲気やよさというような、彼らが自らの感情に向き合って、それに気づき確認するような、つかみようがなく、心もとないことが求められるのであり、したがって、考えることで頭の中を整理したり、論理性が優先されることではない。」と表わしている。歌にあることばから得るイメージが正確さより「つかみようがなく、心もとないこと」であることが個性と認められ、論理性を優先させないことは重要である。歌ってみる過程から自由にイメージを持つ経験することは意味があったと考えられる。

表3 歌を選んだ理由 n=33

うたを選んだ理由	人数	%
季節感がいいから	7	21.2
イメージがわいたから	7	21.2
好きだから	5	15.2
楽しい歌・かわいい歌だから	5	15.2
今練習中だから	5	15.2
自分の誕生日だから	1	3.0
自然がいっぱい	1	3.0
園で聴いた	1	3.0
ストーリーが面白いから	1	3.0

表4 歌った気づきのキーワード n=33

歌った気づきのキーワード	人数	%
楽しい	5	15.2
想像して	5	15.2
イメージした	4	12.1
明るい	3	9.1
懐かしい	2	6.1
かわいらしい	2	6.1
擬音が難しそう	2	6.1
子どもの気持ち	1	3.0
歌いやすかった	1	3.0
大きな声	1	3.0
優しい歌	1	3.0
楽しく制作できそう	1	3.0
ドキドキした	1	3.0
リズムが楽しい	1	3.0
大きな声	1	3.0
大きな動作	1	3.0
無記入	1	3.0

Ⅲ.-2.-2. 制作

ワークシートの感想によると、技術面として、イメージを色や形で表現することの難しさが見られた(資料1)。意見として、「イメージは漠然としていたので、形にするのは難しいなと思いました。」とあった。この場合、イメージを具象化する過程の苦労が見える。イメージ表出については、「歌いながら作ると風景がたくさん浮かんできて作っていて楽しかったです。」と自分のイメージを構築する工夫も見られた。また制作技術について、「切ったり貼ったりすることが少し難しかった。」といった、技術の難しさの記述は14名にみられた。しかし、この14名のうち9名は、「大変であったが楽しかった。」など、取り組みの手ごたえが続いて記述されていた。これは、技術を覚えていくことへの前向きな意欲が見られた。この様子から、造形と音楽という違う分野でありながらも、『造形活動』での表現表出を生かせるよう段階を踏む重要性が見えた。一方、イメージの表出に関して、「青虫を主人公にしてチュウリップを見ている様子を表現した。」や、「雨粒の大きさを変えることで、いろいろな雨があることを表現した。」「飛び出す仕掛けをしたり、カエルの表情を変えたりしました。」といった、自分ならではのこだわりを持った記述もあった。これは、個性を重視して人と違った視点で取り組んでみた様子が見られた。また、「どうすれば発表の時、みんなが楽しくワクワクしてくれるかを考えながら作った。」

や、「子どもたちがイメージしやすいいろいろな工夫ができた。」と、発表する場合を想定した観点を育めた学生もみられた。

以上のように、学生は試行錯誤しながら、個性を重視する表現を楽しもうとしている。指導側として、『造形表現活動』との一層の連携を図り、表現表出の技法を丁寧に行うことが重要と分かった。

Ⅲ.-2.-3. 発表

発表をした感想(自由記述)を、感情に関することと、技術に関することの2面から分析する。

音楽での表現は、他者の存在の影響が大きい。発表時の感想として、12名が「楽しい」、6名が「うれしい」の記述がみられた。自分のイメージの表出が素直に喜んでいる感じが伝わった。特に「うれしかった」に関しては、『うたのえほん』への他者の反応が理由として挙げられていた。自分の表現に共感してくれたことが要因として述べられていた。が手ごたえを感じた様子であった。を共感してくれたことや驚いてくれたことに依る嬉しさであった。また、発表することで、自分の課題に気付く学生もいた。歌に合わせたページのめくり方、笑顔、表情などの工夫が大切と述べられている。半面、12名が「緊張」、2名が「恥ずかしかった」との記述がみられた。このように、『造形表現』で行った制作と違う緊張感が、自分らしい表現へのハードルとなった可能性は強い。造形による表現を見せることと音楽での表現が、相乗効果になる発表の支援が必要である。緊張の強い学生には、歌の導入の声かけによる雰囲気作りも有効かもしれない。さらなる手立てを考案していくこととした。

Ⅲ.-2.-4. 他者を鑑賞して

他者を鑑賞した感想(自由記述)からキーワードを分類した結果(表5)、「違う」が最も多かった。「違う」と書かれた文すべてに否定的な見解は見られなかった。何が「違う」かは、一人ひとり違う(4件)、表現が違う(2件)、個性が違う(2件)、工夫が違う(以下1件ずつ)、違う発想、めくり方の違い、イメージが違う、であった。自分との違いや、全員の違いに気づきが見られた。その違いに、楽しい(5件)、すごい(2件)、おもしろい(2件)、わかった(1件)、思った(1件)と、気持ちが記述されていた。ほかにも、自分にはない発想(1件)もあり、自分と他者との違いに観点を持てた。さらにそれが楽しい、おも

表5 他者を鑑賞したキーワード

キーワード	数	%
違う	12	8.8
楽しい	12	8.8
工夫	11	8.1
同じ曲	11	8.1
すごい	9	6.6
仕掛け	8	5.9
個性	6	4.4
上手	6	4.4
一人一人	6	4.4
飛び出す絵本	5	3.7
可愛らしい	4	2.9
手が込んでいる	4	2.9
凝っている	4	2.9
参考・真似したい	4	2.9
面白かった	3	2.2
素敵	2	1.5
びっくりした	2	1.5
アイデア	2	1.5
自分にはない発想	2	1.5
やってみたい	2	1.5
表現	2	1.5
すばらしい	1	0.7
感心した	1	0.7
明るい	1	0.7
立派	1	0.7
細かい	1	0.7
楽しませる力	1	0.7
色使い	1	0.7
作りたい	1	0.7
同じ折り紙	1	0.7
目を引く	1	0.7
色鮮やか	1	0.7
クオリティー	1	0.7
頑張っていた	1	0.7
努力	1	0.7
保育士になったら	1	0.7
他の歌で	1	0.7
もっと頑張ればよかった	1	0.7
いろいろな技法	1	0.7
学べる	1	0.7
雰囲気が変わる	1	0.7
想像以上	1	0.7
発見	1	0.7
合っている	1	0.7

計 136

しろいと受け止められていた。同様に、「違い」について、11名が同じうたへの表現の違いに目を向けていた。これも技能等の優劣ではなく、同じものが1つも無かったことへの価値が見出されている。また、「工夫」のキーワードより、表現の技法への気づきが多くみられた。同じ材料であるにも関わらず、工夫の多様性に気づきがあった。これは、技術は自分らしいイメージを表現するために大切であるという観点ととらえられる。

発表終了後は、作品展示を行った。発表で目にして興味を持った『うたのえほん』を、実際に手に取って見た。学生の意見で、「いろいろな仕掛けがすごかった。」「あのような工夫をもっと丁寧に考えればよかった。」「何かの機会に、真似をしてみたい。」と、独創的な仕掛けに感動の声が多く挙がった。「みんなまで発表しあうことで、そこから学べることが多いこともわかりました。」とあり、他者理解の環境設定になったと考えられる。

Ⅲ.-2.-5. まとめ

今回の実践から、自分のイメージを造形にして伝える過程では、制作の難しさや発表の緊張に直面した学生は多かった。しかし、理由をもって自分で歌を選んだことから、自分らしく表現しようという姿勢は持てた。そのための「自分らしさ」や「工夫」を考える機会になった。それを人前で表現したことにより、自分の表現への自覚と、さらに他者との「違い」に気づいた。それが楽しい、面白い、すごいと受け止めることは、表現しようという意欲は共通ながら、表現は多様で良いという個性重視の兆しととらえられる。この体験が今後、子どもたちのイメージの多様性を認め、感性を豊かにする指導力養成につながっていくと考える。(杉山祐子)

Ⅳ. 全体的考察と今後の課題

『造形表現活動』で習得したイメージの表出では、自分と造形との2者の関係であった。一般的技法を習得したうえで、自分の内面と向き合い、作品として表出した。その表現の評価は教員が直接行う。6回にわたる授業の中で、学生は段階的に技法を向上させていった。それが作品に着実に表れていた。しかし単なる技能の向上ではなく、その背景には、「自分のイメージを伝えたい」という意欲があることで

あろう。造形が苦手な学生も存在する中で、技術の水準だけが評価ではないことが伝わったことが要因と考える。そのことにより、個性の重視を中心に置いたことで、自分の感性に向き合った表現の表出が可能となったとみられる。この成功体験は造形にとどまらず、他の分野でも生かされる契機になると考えられる。今回の実践で、保育者養成校の役割は、「意図を持った表現」に目標の方向を向けることと、そのための基礎技能を身につけることに重点を置くことが確認された。

『音楽表現活動』では、他者を意識する「発表」の場が発生した。その場の聴衆のリアルタイムな反応が表現の評価になった。聴衆の前での緊張感を、聞いてくれる、見てくれる感覚により喜びや楽しさに変えられる場の設定は最も重要と分かった。その環境設定が新幼稚園教育要領や新保育所保育指針の目指すところであろう。このような評価の観点に自ら気づく表現活動の経験を積み上げていくことが重要であることが分かった。学生の自身の個性を認め、幼児の個性を理解する観点を広げるために、領域の「表現」が、造形や音楽、身体など、すべての表現が相互に影響し合う授業を設定していくべきであろう。

今回の実践から、自分のイメージを形にして伝えることが聴衆との相互作用で、より表現の楽しさを得る実感を持てた。また、他者の表現への理解と評価の視点が育ったことは有意義であった。『造形表

現』との連携は、まだ模索の段階であったが、教員間の明確な評価観点と授業計画をもって、個性を重視しながら総合的な表現力の育成を担っていきたい。2年次で開講している『総合表現活動』は、まさしく表現のあらゆる技法を活用して、舞台発表を行う。その場合の評価も、個性を重視した表現により一人一人のよさや可能性が高まることを目標としていきたい。このような保育者養成課程での取り組みが、現場の子どもたちへと向けられる理解や評価となっていくであろう。（土屋明之・杉山祐子）

引用文献

- 磯部錦司（2014）造形表現・図画工作. 建帛社
- 岡田泰子, 富沢杏安音, 杉山祐子（2018）音楽表現の指導法に関する一考察. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部教職実践研究第3巻第2号, 168.
- 小林美実（1998）「うたのほん200」. チャイルド社.
- 文部科学省（2017）「幼稚園教育要領」. フレーベル館.
- 山崎正彦（2016）歌詞の内容を反映した表現の創意工夫に関する研究. 武蔵野音楽大学研究紀要第48号, 203-219.
- 山脇恵子（2010）色彩心理のすべてがわかる本. ナツメ社.

資料1 『うたのえほん』を作成した感想	
1:	クラリネットを表すことが難しかった
2:	考えるのがとても楽しい。アイデアはあまり浮かばなかったのも、もっと知識をつけたいと思いました。
3:	なかなか時間がかかって難しかったです。でも楽しかったです。
4:	自分でイメージをして表現することが勉強になりました。
5:	歌詞から想像して、歌に合わせて楽しく作れたのでよかった。
6:	何の絵か分かるように工夫してできました。色なども考えて、楽しく作ることができました。
7:	シンプルにできた。あまり工夫ができなかった。
8:	作業は大変だったけれど、やってみたら意外と楽しくできたので、よかった。
9:	子供たちがイメージしやすい、単純な感じで作ったり、どの色を使うかを考えたり、いろいろな工夫ができた。
10:	青虫を主人公にしてチューリップを見ている様子を表現した。早くチューリップを作り歌に合わせて工夫ができた。
11:	作っていてすごく楽しかったです。もうちょっと工夫したほうがよかったと思いました。
12:	作っているときに、どんどんアイデアが出てきて、すごく楽しかったです。
13:	もう少し凝った絵本にすればよかった。
14:	どんな色にしようか、どんな工夫をしようかととても悩みました。完成することが嬉しかった。
15:	折り紙を折るところが難しかった。でもいろいろな折り方を覚えられてよかった。
16:	細かい部分を切ったり貼ったりすることが少し大変だったけれど、作るのは楽しかったです。
17:	歌いながら作ると風景がたくさん浮かんで来て作っていて楽しかったです。ららららのページはイメージを工夫して表現することができました。
18:	イメージは漠然としていたので、形にするのは難しいなと思いました。
19:	チューリップをたくさん作る事は意外と大変。
20:	絵を書くことではなく、切ったり貼ったりすることが少し難しかった。
21:	よりリアルに表現したいと思う場面には、色々工夫をして自分の生活の中からのものを描いてみました。氷の強さを表すためには何色か使うといいこともわかりました。
22:	小さく切るのもそれを貼るのもとても難しかったです。
23:	簡単な歌だと思っていたけれど、よく考えてみると、表現の仕方が、難しかったです。
24:	飛び出す仕掛けをしたり、蛙の表情を変えたりしました。一つ一つの場面を考えて作るのは楽しかったです。
25:	大きく絵を書いたので、見やすい。一緒に歌いながらできると思って作ったのでよかった。
26:	背景の色選びも迷いました。折り紙の使い方1つでインパクトが出るのが実感できました。
27:	パンダの顔など動物たちの顔のパーツを作るのが難しかった
28:	1枚の中の構成を決めるのが大変でした。雨粒の大きさを変えることで、いろいろな雨があることを表現した。
29:	どうすれば発表の時、みんなが楽しくワクワク見れるかを考えながら作った。ピケットが本当にポケットから出てくることで、インパクトを作れた。
30:	難しいしめんどくさいと思ったけれど、作り終えたときには満足感で嬉しかった
31:	絵をどのようにしたら歌詞と合うかを考えるのが難しかった。豆の絵を工夫してできてよかった。楽しかった。
32:	頭の中に浮かんだイメージを、形で表現させるのが難しくて、簡単そうに思えたけれど大変でした。